

(紀行文)



## 中国の秘境 九寨溝と黄竜寺

玉村和彦

九寨溝より黄竜寺への途次

出発まで

宇宙から地球を見たならば、山脈は地球の髪(ひだ)かあるいは皺(しわ)に過ぎないだろう。そんな皺に魅力を感じて、毎年多くの人が山に登る。しかしながら多くの皺の中でも、未踏峰と呼ばれる高い山は数少なくなった。同志社大学山岳会が登ろうとしているチベットにある康格多峰(カント峰七、〇五五メートル)は、そんな数少ない山の一つであった。それだけに出発までには多くの困難が待ち受けていた。

まずカント峰は中国とインドとの国境紛争地域にあったため、許可を得るまでが大変であったが、いまここではそれを記さない。問題は許可を得た後で、国境紛争が再燃し、出発間際に延期せざるを得なくなったことである。そこで私達は表敬団を北京とラサに送って、登山の早期の受け入れを懇願し、一方学生主体の登山隊には、早期の許可を期待して別の山(四川省にある同志社大学山岳会が一九八一年に初登頂した四姑娘山の山域)に、とりあえず高所順応に行かせることにした。昨年九月のことであった。そしてその両方に私は参加する事

になったのであるが、この二つに参加しようとする、日本に一旦帰ってもまたすぐに出発しなければならなかった。そこで私は登山隊が来るまで成都で、登山隊の隊荷の受け入れなどの雑用をしながら暇をみつけて行った所が、この旅行記の舞台である。

### 中国の旅行事情

私がかねがね四川省の北にある九寨溝(きゅうざいこう)・黄竜寺(こうりゅうじ)に行きたいと願っていた。黄竜寺のそばには雪宝頂(五、五八八メートル)と呼ばれる美しい未踏峰があつて、四川省登山協会より同志社に登らないかという話が何回かあつたからであつた。(最近、日本ヒマラヤ協会が初登頂に成功している。)

中国の旅行は、以前に比べるとかなりしやすくなっている。しかしそれも大都市でのこと、地方の旅行は依然として厳しい。外国人が自由に旅行できるのは、開放された地域でも一類開放と呼ばれている地域(大都市と著名観光地)のみである。外事弁公室より許可書を得たならば、二類開放地

域でも旅行が可能であるが、個人に対してはなかなか許可が下りない。ただしこの場合といえども、間もなく中国の一部となる香港の人々に対しては、別扱いである。

さて二類開放地域である九寨溝・黄竜寺に行こうとした私は、当惑した。四輪駆動車に通訳をつけてのトレッキングとして、規約通りに算出してくれた登山協会の見積



もりは、六、八九五元(約二四万円)であったからである。最近では中国の人々にも余裕が出てきて観光地への旅行が盛んになってきている。私はそれまでに成都の街の看板で、この九寨溝・黄竜寺への七泊八日のバス・ツアーがたった七五元(三千円)であることを知っていた。(それは私達にと

カ月の月給分に相当する。)だが私はその旅行社でそのツアーへの参加に外国人は駄目だと素気なく断られていた。

私が泊まっていた錦江賓館は、成都では最高のホテルであった。幸いにもそのホテルの入り口に、中国語と英語で六泊七日の同地域へのツアーを一八五元(七、四〇〇円)で勧誘する立て看板が出ていた。

翌朝、そのバスの客になった私は、私を除く二五人程の乗客の全員が、香港人であることを知った。彼らはまず高

級ホテルには泊まらない。立て看板が錦江賓館の宿泊者のほとんど目立たない外にあったのもその為であろう。そして日本人に要求される許可証も、香港人と見なされてかなんの手続きも必要とされなかった。

#### バス・ツアー

中国は大きい。とてつもなく大きい。中国全図の中では、四川省の省都である成都と省の北部にある九寨溝とは、ほぼ同じ地点にある。しかしその間の道路は約五〇〇キロ、一日ではとても行けない。

主要な道路は、ほぼ二車線であるが、その道路は曲がりくねり、自転車の通行が多く、その上穀物の乾燥の場になっていたりする。しかも荒っぽい運転は、いややおおなしに交通事故を増やす。道路で人だかりがしていれば、事故かあるいは自転車同士トラブルである。そして山間地帯では、川の中に仰向けになったトラックや、動かなくなつた車を修理しているのを見かけるのもしばしばである。

私達の乗った日本製のマイクロバスもその例に漏れず、七日間にパンク三回(そ



の内一回は両輪がパンクし、サスペンションの折損のトラブルが一回あった。中国の運転手は優秀である。サスペンションの修理すらも自分でしてしまふ。ただ故障の都度、私達は数時間待たされることになった。

初めから予定されている長距離のスケジュール、スピードの出せない道路、そして車のトラブル、集合時間に集まらない乗客、私達のバスは、六泊のうち三泊までがなんと夜の十時以降に宿に到着するという

一部屋を独占した。部屋にはたいがい三つか四つのベッドが入っていた。一ベッド四元から八元であるので、全部のベッド分を負担しても千円までであった。ベッドには六つ折りにされた布団が一枚少し斜めに置かれてるのが常である。そして魔法びんのお湯を洗面器に入れて、洗面を済ませれば、食堂で食事ということになる。田舎の旅館ではメニューなどない。私は料理の注文をもっとも苦手としていたので、香港のグループに任せていた。

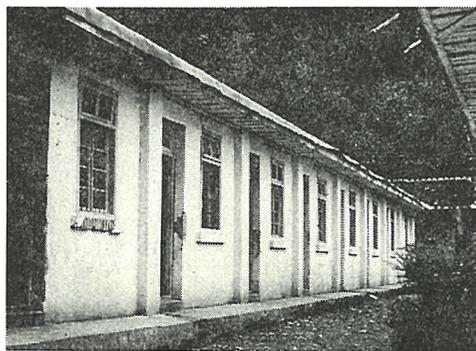
始末であった。

宿は招待所と呼ばれている所がほとんどである。ツアーの費用一八五元は、交通費のみである。バスは、招待所に横着けされる。そこで宿に着いたら、すぐ自分で交渉して部屋を確保しなければならぬ。といっても招待所は田舎の町だとたいがい一軒であるから、時には混んでいて相部屋になることもある。

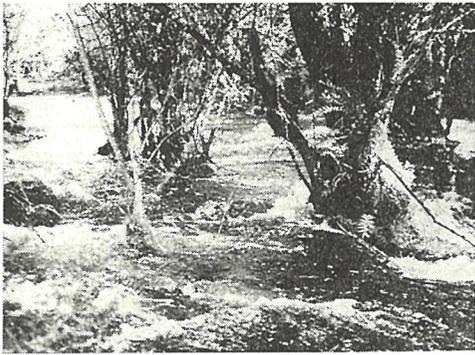
生温かいビールをどんぶりで飲み、そのどんぶりに料理をとって食べるが、そこは中国、時に美味しいのにおつかる。香港の人々は、箸をティッシュで丁寧に拭いてから食べ始めるが、私は中国で流行っているというB型肝炎は、箸からはうつらないと割り切ることにしていた。

### 九寨溝

四川省が豊かなれば、中国は飢えること



九寨溝の諾日朗招待所



九寨溝 樹正群海にて

がないという。成都からの東北東の道は、穀倉地帯を突っ切っている。徳陽の町を過ぎ綿陽の町に入ると、新しい家が多い。電子工業都市として脚光を浴びている町である。間もなく山間部に入り、かなり走って夜の八時に平武に着いた。

平武には報恩寺という明代に建てられた由緒ある寺がある。文化大革命にも破壊を免れた数少ない寺である。平武からの道は、ぐんぐんと高度を上げていく。森林資

源に恵まれない中国でも、ここはモミなどが豊富だ。すでにナナカマドらしき木が色づき、シャクナゲやヤナギランも見られるようになる。峠を越えた南坪県は四川省のアバ・チベット族自治州の一つである。九寨溝はその南坪県にある。

寨は小さな集落、溝は谷を意味する。すなわち九寨溝の名は、この谷(樹正群海溝)に九つのチベット族の集落があることに由来する。Y字状に総延長四〇〇五〇キロあるだろうその谷は、川幅を広げ狭めて池となり滝となっている。スワンの池、熊猫(パンダ)の池、孔雀の河道、真珠の滝、火花池などとの名付けられた池・滝は、正に文字どおり鏡のごとく周りの山を映し吸いこみ、エメラルドに、燃えるような赤色に、すいこまれるようなブルー・マイカといった光の色として発散している。そればかりではない。池と池とのあいだには、小川が何百という浅瀬を形成し、無数の柳がせせらぎを聞くようにして枝をたらしめている。柳の根元が時に赤い髭状になって水に躍っているのは、なぜだろうか。滝をあらわずには中国語の瀑布が良い。しかし水し



チベット族の水車小屋

ぶきを上げている滝だけではない。柳の生えている浅瀬が時に段差をなして、ミニ滝を川幅一杯に広げているが、不思議と音をたてていない。川で原色の衣類を洗濯するチベットの娘、その上では水車(日本のとは異なって水中に水平にある水車)が静かに廻っている。私はこの世のものとは思われぬ九寨溝の美しさを手以上に表わせないので、じれったさを感じる。ただデゲと呼ばれる山の神が、鏡でもって恋仇を破ってえ



何百とある竜の鱗 黄竜寺にて

### 黄竜寺

チベット娘シャイモとの愛が、何千年の間雪と氷をとかして、この地方をかくも美しい地域に変えたのだという民話を紹介して、次のこれまた絶景黄竜寺に移ろう。

ンバンは岷江の上流にある農業主体のチベット族の村である。家々の前には、轆がちやうど日本の鎮守の祭りの時のようにはためていた。

ンバンから東に峠をこえて半日程行ったところに黄竜寺がある。そこでは不思議なことに雪宝頂からの谷の一つが、あたかも黄色の竜のごとくに雪山を指して舞い上がろうとしている。地質については全く門外漢であるが、水の中の硫黄分を含んだ石灰質がお盆状に凝固したためか、その川が数限りない池（二、二〇〇あるといわれている）となって階段状に細く太く続いている。そしてそれぞれの黄色を帯びた乳白色のお盆が、竜の鱗として水をたたえているのであるが、その水の色はあたかも寶石のようである。エメラルドを基調にヒスイ、アメジスト、トッパーズ、サファイアのごとくにに光り、しかも風もないのかすかに揺れている。池のまわりは、モミに似た岷山冷松、四川唐松、シャクナゲが茂り、その下には苔が柔らかいカーペットとなつて、北八ヶ岳にいたのではないかと錯覚させる。



黄竜寺と雪宝頂

上流には黄竜寺が復興されているが、もともと道教の寺だったという。入り口より二時間程で行けるその寺に着いた時には、九月だというのに烈しく雪が舞っていた。対岸沿いの帰路を急いだ、入り口近くのチベット仏教寺院は破壊されたままだった。

私たちは二つの名勝を見終えたので、成都に帰らねばならなかった。だがここでも



ヤクに乗った牧民



ルアルガイ若爾蓋で会ったチベット女性

予期せぬことがおこった。岷江は暴れ川だ。ソンバンの先の岷江沿いの道路が三〇キロにわたって決壊していた為、私達は幸運にも北の草原を大廻りせざるをえなかったのである。若爾蓋(ルアルガイ)、紅原(ホンユアン)の二県は、どこまでも丘状に草原が続いていた。草原と一語でいっても、足下をよくみると、色んな花が咲いていた。そしてどこまでも続くその草原には、ところどころで羊やヤクの群を見かけた。ここは毛澤東に率いられた紅軍が、有名な『長征』をしたルートでもあった。

そこで私は漢族化していない牧民であるチベット族に、出会ったのである。しかも女性はチベット服をチベットでは見たことのない豹の毛皮であしらっていた。私はおそらく中華人民共和国が建国されて以来、この地域に入った最初の日本人だろう。

九寨溝・黄龍寺……日本に全くといってよいほど紹介されていないこの二つの景勝地が、蘇州や杭州と同様、人口に膾炙され

る日も案外近いのではないだろうか。その日には、四川の草地三県とよばれる若爾蓋、紅原、それにアバも開放地域に入って欲しいものである。

(大学商学部教授・体育会山岳部長)

